令和３年度　第３回地域福祉活動計画策定・推進評価委員会　会議録

日　時：令和４年２月７日（月）18：00～19：30　（Zoom 同時開催）
会　場：ココネリ研修室１

１．事務局長挨拶

本日は今年度第３回目の地域福祉活動計画策定推進評価委員会となるが、委員の皆さまには時間をとっていただきありがとうございます。コロナの感染も急速に拡大しているため、本日はオンラインでの開催であるがよろしくお願いしたい。本日は各チームの取り組み状況を報告させていただく。中でもキーパーソンチームにおいてグループインタビューなどもさせていただいたが、委員の皆さんにも時間をとっていただいたことに厚く感謝申し上げたい。グループインタビューの中でも、それぞれが新しい視野を広げるような気づきや考え方にも一定のまとまりがあったことの報告も受けている。本日も忌憚ないご意見を頂戴したい。

２．配布資料確認

３．練馬区地域福祉計画の進捗状況報告

委　　員：練馬区の地域福祉計画は社会福祉協議会の地域福祉活動計画と連携を図りながら取り組みを進めていくこととしている。昨年 11 月に地域福祉計画推進委員会及び福祉のまちづくり部会、権利擁護部会を開催し、取り組みの進捗を報告してきた。報告の中で、練馬区社会福祉協議会に関係するところを報告する。施策 1「区民との協働と地域の支えあいを推進する」の取り組みの中で、地域福祉コーディネーターによる、地域福祉の基盤づくりという項目がある。事業内容としては、社会福祉協議会に地域福祉コーディネーターを配置し、地域支援ネットワークの推進を構築することとし、ネリーズの意義を伝え、協働して地域づくりを進めるという内容。令和２年度の取り組みとしては、オンラインを活用した懇談会等でネリーズ同士の交流を図ったり、地域活動に関する情報提供を行っていただいた。また、民生児童委員協議会に地域福祉コーディネーターが出席して、各拠点で報告に取り組んでいただいた。委員からは、ネリーズやキーパーソンが少し分かりづらいのではないかという意見もいただいた。令和３年度の取り組みとしては、ネリーズ活動の周知、オンラインを利用した交流によりネリーズの登録者を増やしていくという取り組みとしている。　続いて施策 5「権利擁護が必要な方への支援体制を整備する」という取り組みになる。成年後見制度利用促進基本計画として位置づけられている部分で、主に社会福祉協議会の権利擁護センターに取り組んでいただいている事業となる。成年後見制度の利用を支援するとして、中核機関の取組として地域連携ネットワークの構築、周知啓発、市民後見人の養成等に取り組むという事業内容になっている。地域連携ネットワークの構築では、検討支援会議やネットワーク連絡会を開催して、権利擁護センターと行政、専門職団体、地域包括支援センターなどの関係機関が連携し、利用者支援に取り組んでいただいている。令和４年度以降もこの取り組みを継続、充実させていくとしている。市民後見人についても、養成研修を実施していただいている。権利擁護部会員からの意見としては、地域連携ネットワークにおいて大切なのは、本人の意思決定支援も含めて多角的な観点からアプローチしていくことである。本人の意思表示が難しい場合には、家族や普段かかわっている人が集まって方針を決めていくことが重要になってくるというものがあった。また市民後見人の養成についても、研修受講生のモチベーションの維持や働く場づくりについて、区の状況を把握して対策を講じる必要があるのではないか、また専門職後見人で問題が解決した案件を市民後見人につなぐなどの受任の流れができると良いのではないかというご意見もいただいた。法人後見についても、委員のご意見

として、後見業務が長期にわたることが予測されるため、法人後見を行う法人の体力の部分やノウハウ的な部分のバックアップをしていく必要がある。他 NPO 法人同士の横のつながりをつくる交流会などで情報共有ができると良い、積極的に関係性を作っていく必要があるといったご意見もいただいている。地域福祉権利擁護事業については、複合的な課題があり生活支援員では対応が難しいケースが増えているという課題もあった。委員からは地権事業の利用者が増えていくと、法人後見や市民後見にもつながっていくのではないかといったご意見もいただいている。
以上報告となるが、推進委員会の資料やいただいたご意見は、練馬区のホームページにも載せているので、お時間があるときにご覧いただきたい。

４．第５次地域福祉活動計画の取り組み状況について　【資料 1～6】

○第５次地域福祉活動計画　推進評価チームの取り組み

職　　員：①ネリーズ通信（資料１については、前回と変更なし。資料２に基づいて説明）
ほっこりエピソードはネリーズの投稿だけでなく職員が業務の中で聞いたエピソードも掲載していく。

委 員 長：ネリーズのほっこりエピソードも当初は多く寄せられていたようだが、だんだんと少なくなってきている。自分のことでなくても、見かけたり聞いた話などでもよいのでぜひ投稿をお願いしたい。

職　　員：②懇談会（資料３に基づいて説明）
上半期はオンラインの勉強会、懇談会を開催してきた。オンラインでつながれた良さや新しさはあったが、下半期は対面での開催にこだわった。また様々な事業で開催することで多様性の出会いを目指して、なゆたふらっとで３回開催することで企画をしてきた。1 回目はなゆたふらっとで対面で行った。参加したネリーズからは、当初不登校の子どもに暗いイメージやかわいそうな子という話があったが、実際に会場に行って現場を見ることで考え方が変わり、そうでないことが分かったという人もいた。2 回目も対面での開催を予定していたが、コロナの感染拡大もありオンライン開催に変更した。2 回目の参加者 2 名は、それぞれに子ども食堂に参加されていた方だったため、子ども食堂の取組みについて興味深く聞かれていた。反省として、参加者がオンラインを苦手にされていて、約 20 分音声が届かない状況などもあった。第３回目はオンラインで開催を予定していて、現在５名の申し込みをいただいている。つながりたい思いを持ち勉強会から続けて参加されているネリーズもいる。

委　　員：第１回目に参加した。地域で思いを持っている民生委員などが参加。なゆたふらっとの特徴や考え、また集まっている子どもの居場所を実感できていなかった人が懇談会を行うことで、地域の中にこういう思いを持って活動している人や協力している人がいることが分かり、気づきや思いが広がったと感じた。

委　　員：なゆたふらっとでは現象が起きて対応していることに感心させられた。一方でなゆたふらっとに来ている子どもにどういう背景があるのかの原因を考えることは必要と思った。

副委員長:懇談会を行う場所を現場で行うことで気づくことはとても多いと改めて感じた。いろんな生き方、暮らし方がある。先ほども不登校の子は暗いのではないかとあったが、私は不登校の子はエネルギーがあると感じる。今の学校とそりが合わないなど実際の話をしてくれた人もいて、そういった中で不登校のイメージが変わっていったり、いろんな多様な生き方を知るという意味でも懇談会を現場に行って行う意味を感じた。

職　　員：③ホームページ（資料１に基づいて説明）
事務局では、今までのホームページ班に入っていただいている委員のご助言を受けて、興味関心を得られるような動きのある動画の作成に向けて準備している。また、広報委員会のメンバーと一緒

に社協のホームページの来年度中の改訂に向けて検討を進めている。活動計画を紹介するための新しい内容もホームページの改訂に合わせて完成を目指したいと考えている。技術面や費用の課題の整理も他区の状況などを確認しながら進めていく予定。

委　　員：職員は面白い試みをしていると思う。楽しみにしている。社協のホームページは地味になりがちだが、大切な広報活動でもあるのでチャレンジがあってもいいと思う。

委　　員：新しい試みを楽しみにしているが、今の社協のホームページは重要なお知らせがずらっと並んでいる状態。携帯で見ると埋もれてしまうものもある。全部大事だと思うが、情報量が多く本当に伝えたい情報が行きわたらない心配もある。フェイスブックや広報誌などもあるので、今後も発信し続けたいと思う。

職　　員：④キーパーソン事例　（資料４、５に基づいて説明）

目的、ディスカッションの方法、インタビュー・ディスカッションについては、資料４に基づいて説明する。資料５の説明になるが、グループインタビューとディスカッションで気づいたことをまとめている。まず五つの気づきがあった。

一つは、「キーパーソン・ネリーズ・地域福祉コーディネーターの役割には柔軟性がある」という概念の説明をしたい。役割の柔軟性は、下の図で二つ例をあげたい。一つは、ネリーズの円だけがあるという前提で見てもらいたい。地域の役に立ちたいというまだ活動をしていないネリーズがいる。そこに突き動かされる出来事に出会うことで、隣のキーパーソンの円に移るということが起こる。そのネリーズ、キーパーソンをつなげる役割として地域福祉コーディネーターがあるという考え方になる。二つめに、サロンなどの地域の拠点にネリーズがいる。すでにお互いを助け合うという活動をしていく中で、地域の課題を発見し、そこにキーパーソンの機能が加わる。そして地域福祉コーディネーターは、さらなる活動につなげたり、三位一体のシステムを作るという考え方。このどちらも三位一体を機能として考えた時に分かりやすくなる。事例は解釈する人の視点や見立てによって変わることを指して、（解釈は自由）としている。逆に定義づけをしたほうが分かりやすいという考えも聞かれた。定義づけは理解が明確化するというメリットがある一方で、それ以外の見えない働きに気づきにくくなるというデメリットもあるのではないか。これは、三位一体を考える上で忘れてはならないことだと考える。

次に、「何かを動かす人・物・環境・課題がないと何も起きない」の概念の説明をしたい。三位一体の活動には、それが発生する出来事がある。人で例えると、例えば生活困窮の人が中心となって、その当事者の力をみんなでシェアするイメージを持っていたり、物では前々回の委員会であげた亡くなった人の思いが詰まった琴が例としてあげられる。環境については、サロンなど地域の居場所があり、そこに人が集まることで様々な地域課題の発見やネットワークができるイメージとなる。これは時系列的に一番先にあるものだが、図で見ると真ん中にあるとイメージしやすいことが明らかになった。

三つめ、「それぞれの立場や環境で突き動かされた事例によって意識化し始めている」について説明をしたい。事例をふたつ紹介したい。ひとつは、ボランティアセンター職員の事例。今までも心が動いたことを共有していたが、他の部署の事例を聞くうちに、三位一体が言語化できるようになり、ネリーズやキーパーソンに対して、その活動に後押しできる声掛けが意識してできるようになったとの話があった。さらに部署の職員からもいいなと思えるエピソードを聞くことができるようになったとの声もある。二つめは、レインボーワーク職員の事例。この職員は白百合の水の事例を自身の支援に見立てた。水の事例では利用者の水へのこだわりを水への関心が高いとポジティブに捉え、水やりや加湿器の水入れなどの良い行動に変えることやその利用者に対する周囲からの見方もポジティブになったものであった。これを応用して、レインボーワーク職員は、自分からの挨

挨が苦手だが挨拶をされると挨拶できる利用者に対して、企業側からの挨拶があれば人間関係が向上する結果になると考え企業へ提案をした。さらに企業の人をネリーズにすることが可能でないかとも話をしていた。また、ある委員は、自身の活動団体を分析してみたら、三位一体の機能をすでに団体の中に持っていたとの気づきを話してくださった。

四つめ、「周辺の人、団体、職場の人に伝え話し、広げている」をボラセンの事例で紹介したい。ボラセンでは定期的にボラセンゼミを開いている。ゼミではネリーズ同士で地域の気になることや興味があることを伝えあっているが、ファシリテータとなる職員が活動の共感やいいなと思うことを伝え返したり、活動を後押しする声掛けを行っている。そのことで、様々な形でその後の良い活動の相互作用を見つけることができたと話している。事例として、ゼミに参加していたネリーズが、自分の目の前で自転車と車の接触事故があった時、いつもなら何もできなかったが、その時は自転車の運転者に「大丈夫？」と声をかけることができたという話があった。人に伝え広げるときには、まず、事例をまとめたり、分析したり、活動の後押しや褒めたり、認めたりする行動など様々な行為をしていることが分かった。

五つめ、「言語化、見える化、システム化の重要性について」の概念について説明したい。今までの１から４までを伝えるときには、言語化、見える化が多用されていることが分かった。また、言語化は人それぞれの表現があるため、同じ気持ちを違う言葉で表しているという前提で考えると、話を聞くことはとても大事なコミュニケーションであるという意見があった。システム化の重要性については、地域をよくしたいという思いが一過性になってしまうかもしれないが、もしシステムがあれば、活動を続けることやゆとりができた際に活動に戻ることができるようにもなるなどの意見もあった。

まとめとしては、今回の仮説、三位一体のシステムが地域福祉を推進していることを示唆する結論を導くことができた。自らの活動の事例を作り、見える化、言語化し、三位一体の機能を当てはめ、事例を見直すことで、新たな見方やアプローチ方法の気づきを得たり、他の事例を自分の事例につなげて活かすことで応用力を身につけることができるのではないかと感じた。

職　　員：インタビュー・ディスカッション後に行った３回の報告会でいただいたコメントを紹介したい。

・それぞれの議論に参加した人たちは、議論の向上に寄与したと思う。他の人の発想を学ぶことは良いこと。

・場が重要。突き動かされる気持ちを作っていくためには、その場が重要になる。

・事例を聞いて、自分の経験につなげて、自分の活動につなげる応用力が大切。また言語化が大切だが、言葉を同じにするといいのか。分からなさ、見えなさにどれだけ付き合えるかだと思う。

・現場の感動、熱量をどう伝えていくかだと思う。

委　　員：長い期間このチームに関わらせてもらっているが、この間多くの議論がなされてきた。ネリーズやキーパーソンのカタカナ言葉の難しさはあるが、ミーティングを重ねていく中で、他の人がどんな思いで活動や仕事をされているのか人となりを知りながら話し合えたことが、自身にとってとても重要なことだった。地域福祉活動計画は、参加している人の思いや考えを話し合っていくことが重要と感じる。今回の定義づけの前段階にあるそれぞれの考えの共有する機会を体感することができた。委員になって４年くらい経つが、ようやくみんなの考えを知ることができて、より一体感を持って活動をすることができるようになったと感じる。

副委員長：何度も集まる機会が多かったということで、その人となりと合わせて、どういった思いで活動や仕事をしているかを共有できたことが地域福祉活動計画を推進していくときの原動力になると感じた。他の事例を自分の仕事の中に生かしていったことなど、お互いに影響しあっていくという場を作っていけたことは、社協の中でも良い動きをしていたのだと改めて感じることができた。この活動を推進していく原動力になっていくのだろうという仮説は、ある意味で証明できたのではないか

と思わされた。

委　　員：評価とホームページに関係することで二つ申し上げたい。本日の事例も重要な気づきがたくさんある事例で、こういった事例を社協が積み上げていくことがとても大事になる。冒頭でネリーズやキーパーソンが分かりづらいとの話もあったが、むしろ現実的にどんなことがあって、ネリーズが多様な側面から活動できるということを事例を通じて示すことができるということが非常に大切なので、ここはとても大事な今期の活動として高く評価できる部分だと改めて感じている。そう思いつつ、今日改めて思ったことがある。発表事例は発表者のまとめ方も含め良かったが、初めて聞く人にはその前後関係が分かりづらいとも感じた。白百合の事例で例えるなら、最初にどういうことがあって、どういうことに気が付いて、どのような学びがあったのかということを整理し、一定程度ペーパー化して配るなどで見せていくと良い。そういったことが見える化の大事な部分。先ほどホームページ班から発信とあったが、社協の活動や住民の支えあいの活動は、ものすごく見えにくく、この後評価の話もあると思うが、他者に伝えるのが難しいものなので、工夫をしていく必要がある。そしてそれをどう伝えていくか。ホームページの面白い試みに地域住民をどう巻き込んで作っていくかというところに、社協の意味や意義があるのではないかと思う。それは先ほどの事例の中に出てきた企業の人をネリーズにという発想があったが、いろんな住民の捉え方、ネリーズの捉え方が実際の活動を通じて膨らんでいくとか、広がっていくというところを見せられるような形でディスカッションできると良い。

委　　員：ネリーズ、キーパーソンも分かりづらいところもあるので、事例も分かりやすいところから示してもらえると良い。

委　　員：東京砂漠という言葉があるが、そういう砂漠に少しずつ自ら水をまいて、潤す。自分なりに考える。施設での活動も潤いをもたらすひとつ。色々なものが、努力が、長時間かけて砂漠が潤っていく。そのプロセスだと思う。言語化、見える化、システム化、それがひとつのアイデア。無いよりあったほうがいい。重ねていって徐々に水を含んでいく。一旦含んだ水は社会になっていく、というように考えることがいいこと。そう考えないとやっていけない。課題が大きくて一言で考えられるものではない、でも社協の組織があるから考えられる。

職　　員：⑤評価（資料１、６に基づいて説明）

現在、地域福祉活動計画策定・推進評価委員会における委員の意見・キーワードの拾い出しや各チームや部署が実施した講座・ネリーズ懇談会・ワークショップやシンポジウム等の取り組み報告書、アンケートによる住民の変化をとらえるための資料、素材を集積している。6 月ころまでには、住民等の変化のプロセスが読み取れるような事例やエピソードの聞き取り、共有などを行いながら、5 次計画後半の推進、第 6 次計画に向けての課題の整理と評価を行っていきたいと考えている。資料６の裏面では、計画の評価状況を示している。策定委員からの意見では、コロナ禍で外出できなくなり居場所がなくなり支援が届かない等の障害のある人や仕事がなくなり生活が困難する人の相談が急増する中、既存の福祉サービスでは解決できない状況や課題を共有し、計画の見直しに反映させていく必要がある状況があると捉えた。一方で住民一人一人がコロナ禍の課題を支えていると気づかされ、この状況下で社協を知ってもらう機会にもなっている。中間評価に向けては、今まで潜在化してきた地域の課題、例えば外国籍・フリーランスで働いている人、雇用の縮小、社会、地域とのつながりが希薄の中で生じている課題などに対して、地域住民、社協がどう関わっていけるかの新しい視点が必要だと考えている。②、③の取り組み報告書やアンケートにおいては、ズーム、対面、ハイブリッド、拠点で行ってきた懇談会、講演会、講座を通して、コロナ禍だからこそ改めて人と人とのつながり、地域とのつながりの大切さ、人の温かさを実感したという声が多く聞かれた。新たな方法で参加者層の変化があり、継続して参加することで地域の関心が高まり、気づきに

つながっていること、また気づきの共有が広がりにつながっていることも分かった。中間評価に向けては、コロナ収束後を見据えて対面、オンラインそれぞれの良さを踏まえて事業の取り組みにつなげていきたい。④の取り組みでは、「キーパーソン」「ネリーズ」の捉え方に関する意見交換を通して、気づきや意識の変化が生まれ、共有することで捉え方が広がった。「共感」が発信力や三位一体のシステムにおいて大切であることがわかった。中間評価に向けては、４つの戦略チームを中心に取り組むことで、アイデアや視点が広がり、発信力が高まっている。対面での温度感やオンラインなど、その時々の目的に応じて組み合わせながら効果的に推進して思いの共有を図っている。テーマ性を持った懇談会は、より地域の課題を掘り下げ参加者の地域活動への意識の高まりにつながっている。⑤においても、コロナ禍で生活困窮・貸付・給付金など、今まで社協の存在を知らなかった人たちとの関わりで、情報格差や外国籍・失業などでの新たな課題が見えた。社会福祉法人等のネットワークで生きづらさを抱える人への就労支援の理解を深め、考える場を作った。中間評価に向けては、コロナ禍でも皆で支えあうことの大切さを再認識し、プラスの視点で取り組むきっかけになったこのつながりや広がりを大切にしていくこと、複合的な生活課題に対する地域や関係機関との連携による対応、仕組づくりについては、個別事例からプロセス、地域の関わり、制度のはざまに対応する社会資源の開発なども踏まえて、社協がなすべく支援の視点について共有、検討する場を設けて分析していきたいと考えている。

委　　員：3 週間前に行った評価チームでの話し合いでもう少し具体的な話やエピソードを出して欲しいことを伝えていたが、今日のキーパーソン事例を聞いていて、具体性のある分かりやすい報告になっていた。今日の資料６の４にあるようにやったことでどう変化したか、目標に近づいたかなど具体性があると評価しやすい。キーパーソン事例などもっと共有できると方向性も見え、評価も具体的にできると思う。

委　　員：今参加したところなので今回の全容が分からないが、第４次計画から引き継いでいる課題について第５次計画でできているかということと、このコロナ禍で新しい課題ができているなら、確認して行く必要があることをチームと確認したところ。

委　　員：先ほど他の委員からもプロセスとあったが、これはとても重要なこと。社協がやっていることのプロセスをどう評価していくのかというのはとても難しいこと。コロナで大変とあったが、評価の説明であったコロナ禍での多様性を物差しで見た時に、これだけ大変な時に社協が多様な人と関わることでできたというような成果があがったということであったり、工夫という面で考えるとコロナ前では考えられなかった工夫をお互いに考えられたことをポジティブに評価し、その評価も含め社協として地域住民とどう共有できたかということを事例とともに出していくことで評価が目に見える形に近づいていくと思う。

評価は成果を評価しがちだが、実はプロセスを評価していくのが、社会福祉の仕事の中では最も大切なところ。結果や成果を見るのではなく、仕組を見るが一つの考え方。記録の書き方、実践への活かし方もその個人の捉え方ではなく、事業所が仕組みとしてどう捉えるか、どう支援しているか、それをどう評価するかということは仕組みの評価につながる。社協活動が複合的なので、○か×にならないが、このあたりの評価の物差しや目盛りをどう設定していくかということをみんなで協議していくことが、社協活動のひとつと思うので、今後深めていけたらと良いと思う。

５．まとめ

副委員長：本日の各チームからの報告で、活動計画が推進されていることを実感できた。今期はコロナ禍という前代未聞の状況に遭遇し、活動推進にも大きな影響をあたえているが、評価チームの委員からの発言で、コロナ禍がマイナス要素だけだったわけでなく、コロナ前では考えられなかった工夫をお互いに考えて、多様な人達と関わることができたという話は心に残った。福祉の世界ではどうし

ても「する側とされる側」に人を分けてしまうことに違和感を持ち続けてきた者にとっては、コロナは誰もが当事者になりうるという同じ不安を持つもの同士としての平等感覚を共有しつつ、みんなで支えあうことの大切さを再認識させられる機会になったのではと捉えたい。コロナ禍をどう考え捉えるかは、第５次計画の中間を迎える次年度の計画推進のポイントになるのではと改めて思わされた。

６．その他

・しらゆり通信とかたくり付箋チラシの説明。

７．次回の日程について

日時・場所：令和４年６月頃予定

※詳細は後日調整にて決定予定。

以　上